

〈新青年横町〉番外 私と『新青年』趣味——思い出すことなど

元発行人・湯浅篤志

私は川崎賢子さんに誘われて、この『新青年』研究会に参加させていただいた。その当時は、私自身の生活も仕事も中途半端の時期だった（今でもそうだけど……苦笑）。そのような折、川崎さんからのお誘いはうれしかった。三十代になったばかりだったし、この研究会に何かを見いだしたかったのであろう。何かおもしろそうな会の予感があった。一九九〇年春のことだ。

期待に違わず、会は面白かった。叢書『新青年』の発行の仕事も含めて、会の人達との交流が進んでいった。しかし、研究会での素晴らしい発表や意見が、その場限りで終わってしまうのは残念であった。そこで会の人達の言葉が残るように、会誌を作ることを考えたのだ。皆の了解を得て、私が音頭をとって、私の独断で名付けた『新青年』趣味が誕生した。

一九九一年十一月二日と、その創刊号の奥付にはある。皆さんから集めた原稿をそのままコピーをして、まとめて閉じただけのものである。が、しかし、今、手にとってみると、エネルギーが伝わってくるのがわかる。

江口雄輔さんが巻頭に「[『新青年』研究会会報発刊に寄せて](#)」で、こう述べている。

（以下引用）

昨年（一九九〇年）の七月、川崎賢子氏のイニシアティブで研究会が再組織され、各人の課題の追及とともに、こうした問題に取り組むべく活動が再開された。新たなメンバーの参加も得て、月1回の例会を開いてきたのだが、研究会活動 活性化の一助としてこの度会報を発行することになった。研究発表のレジュメ、新しい研究書・研究論文の紹介、新資料の報告、『新青年』と同時代の主要雑誌の目次集成などいろいろな企画が考えられている。

（以上引用）

これから頑張ってやっていきましょう、という気合をいただいたことが、今でもうれしい。また掲載論文でも、とくに、谷口基さんの「笠置山勝一と『新青年』」が光っていて、私もありがたく原稿を頂戴した。この論文があるおかげで、創刊号は、どうにか体裁を保てたといっても過言ではない。

この創刊号は、会員の皆さんからいただいたワープロ原稿を、本当に切り張りしてコピーしただけなので、外見が今一つだった。しかし私個人で作業を行うには限界があり、どうしようもなかった。そこに登場したのが、木本淳さんだった。雑誌のコピーと製本を引き受けてくれるということだった。私は編集作業だけをやればよいことになり、たいへん楽になった。創刊号は、そのようなわけで、リニューアルされ、一九九二年十一月一日にきれいに編集され直されて、再発行された。

それから一年に1冊くらいの割合で発行していこうと考えたが、しかし、かなわなかつ

た。さまざまな事情が重なり、現時点（一九九六年十二月）までに第4号までしか発行できていない。同人誌によくありがちなパターンだと、笑ってお許し願いたい。原稿を何時も早めに出していただいた会員の皆様には本当に申し訳ないと思っている。この場を借りてお詫びしたい。

そもそも私個人の思いで企画した会誌でありながら、なかなか出せなかったのは、私の中で体力がなくなってきたからだと思う。自分でいうのも、おこがましいが、生業（予備校講師）に時間をとられすぎてしまい、まともにものを考える余裕が少なくなってきたのだ。これではいかん、と何度も思い、がんばったが、所詮はダメで、弱音を吐き、滝口さん、小松さん、そして運営委員会の浜田さんの手を煩わせることになってしまった。編集委員会にバトンタッチをお願いした。

※

今回、『新青年』趣味の1号から4号までの総目次を載せることになったが、こうして眺めてみると、いろいろな人達に原稿を書いていただいている。感謝の念に耐えない。これらの書き手の人達が皆、文筆業や研究職についているわけでないことを深く考えるべきであろう。仕事の合間に少しずつ自分の研究を進め、文章にしているわけで、その意味でこれらの文章は貴重なものであるといえる。

そこにこの研究会の素晴らしさがあるわけで、自分の考えたことを発表できる場にこの会誌をしたかった。もちろん文章にする以上は、それなりの内容が伴うわけであるが、読んで、あの本家本元『新青年』の面白さが伝わってくるのがよい。その意味で私は、この会誌を『新青年趣味』と名付けた。研究論文からエッセイまで——。よい意味で、何でもありの雑誌を作りたかった。会員の皆さんもその趣旨に賛同して下さり、会誌作りにご協力いただいた。このあり方は、リニューアルされた会誌にも受け継がれるだろう。

毎回、表紙の絵を西山彰さんに描いていただいたことには感謝している。いつも二つ返事で引き受けてくださり、『新青年』趣味の顔としてすっかり定着した。また、大宮信光さんの連載や八本正幸さんのエッセイはいつもおもしろかった。ここでバラしてしまうけど、猫神博士は八本さんです。いつもたくさん書いていただいてありがとうございます。天瀬裕康さんも小酒井不木に関する文章でいろいろなことを教えてくれた。

たぶん、会員の皆さんは、今回（5号）からの新装開店でも、たくさんおもしろい原稿を寄せてくれると思う。機構的にもしっかりしたので、もっと会誌らしくなり、今後『新青年』研究会が発展するための一助となるはずだ。私が主宰した『新青年趣味』はこれにて終わり、もう皆に迷惑をかけることもないだろう（本当かな？……冷汗）。今後は、新しくなった『新青年趣味』を会員の皆さんに応援してほしい。私のほうは、たとえば、早く会誌に載せられるような原稿を書くようになりたいものである。ではまた。

『『新青年』趣味』第5号（1997・4）より再録